

安全太郎の夜

小田



鳴隆の夜
太郎
女全



河出書房新社

安全太郎の夜

一九九一年三月二〇日 初版印刷

一九九二年三月二八日 初版発行

著者 小田嶋隆

装丁 渋川育由

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三二

電話 三四〇四一一二〇一(営業)

三四〇四一八六一一(編集)

振替口座(東京)〇一一〇八〇二

印刷 株式会社亨有堂印刷所

製本 小泉製本株式会社

©1991 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

ISBN 4-309-00678-7

71.800-

小田嶋隆(おだじま・たかし)
一九五六年東京生まれ。早稲田大学教育学部
卒。食品メーカー営業マンを経て、テクニカ
ルライターとなる。現在は、コラムニストと
してコンピュータにとどまらず、各誌で活躍
中。著書に『我が心はICにあらず』(BNP、
光文社文庫)、共著に『親子で楽しむパソコン
7』(ダイヤモンド社)がある。笹塚在住。一
児の父である。

目次

I 無為について

世界ハッカー会議	9	マドンナ	48
ミヤザキの部屋	15	口	50
説教おじさん	26	ゲガンゲン	53
強い本	29	ビール	54
加山雄三ショー	32	鼻の下	58
肩書	34	ひいき	61
セブンイレブンの夫婦	37	ハンパ仕事	65
つむじ	39	探検隊	68
パパ社長	41	カバの愛	71
ベント	45	ゴールドデンウィーク	74

II 嘘つきについて

本棚……………	81	蟬丸……………	117
高島忠夫さん……………	86	そらみみず……………	119
ネギ畑……………	88	虎馬……………	122
へそ……………	90	くもくも……………	125
シンメトリー……………	93	みみみみ……………	128
耳の純潔……………	96	スペルマン……………	131
看護婦……………	101	ハチの郵便屋さん……………	134
うしろの百円太郎……………	103	馬の骨……………	137
ベロンベロン……………	106	人参人……………	139
タヌキツネコ……………	108	こんにゃく娘……………	142
ケロタン……………	110	ゴゴゴジラ……………	145
陰気他無視 ^{イシキタムシ} ……………	112	タコシタ……………	147
びしょげば……………	115	ベビメタ……………	150

III 後悔について

薄馬鹿下郎	153	継続	160
ヒラメ野郎	156	親知らず	162
地球ブーム	159		
エアリア	169	原宿	195
さいたま博	171	エリザベス	198
世田谷美術館	174	フィットネス	201
ハイドロポリス	177	太宰治	203
ボンバーズ	179	エスパー	206
アメージングスクエア	182	スターの結末	209
ツムラ・イリュージョン	184	目	214
トヨタ・カップ	187	エアロビクス選手権	217
星空	189	ファシスト	219
大相撲トーナメント	192	うなじ	222

IV 用事は明日、あるいは酩酊について

山の手……………	225	涙のわけ……………	230
失われたもの……………	227	サミット……………	233
安全太郎……………	237	巨根……………	266
がんこ……………	240	カラオケ……………	269
カサヤ……………	243	難民……………	272
ワン……………	247	天才サル……………	276
敗北……………	251	ギャルおやじ……………	279
沈黙……………	255	弁解……………	282
OL……………	257	ワープロ……………	285
抜け道……………	259	十年大昔……………	292
寿司……………	262		
あとがき……………	298		

安全太郎の夜

I
無為について

世界ハッカー会議

つい先頃、オランダのアムステルダムで、「第一回世界ハッカー会議」というものが開催された。

これは、注目すべきニュースだ。

「ハッカー」という言葉について念のために説明しておく、これは「回線侵入者」、あるいは「電脳海賊」とでも言えばよいのか、ともかく、反社会的なコンピュータピープルのことだ。

現在、コンピュータは、公衆電話回線を通じて、世界中のコンピュータと接続することができるようになってきている。この、コンピュータネットワーク（またはパソコン通信網）に不正に接続して、他人のコンピュータを勝手にいじくりまわしたり、そのコンピュータに蓄えられているデータを失敬したりする連中が、いわゆる「ハッカー」なのである。

最近では、この「ハッカー」という言葉も、定義が曖昧になって、「コンピュータに取りつかれた人間」、「パソコンのスペシャリスト」、あるいは単に「何を考えているのかわからない変な奴」ぐらいの意味でも使われるようになってきているが、ここで（「世界ハッカー会議」で）言っている「ハッカー」は、まぎれもない、「電脳海賊隊」としての意味の、ハッカーである。

ということつまり、その海賊ハッカーたちが、白昼堂々、公式に報道機関にアナウンスして「世界ハッカー会議」なんてものを催したということは、こりゃ、明らかなる破壊の宣言であり、体制へ

の挑戦なのである。

つまり、「世界ハッカー会議」は、その性質としては、「第一回ヘロイン常用者会議」だとか、「世界泥棒サミット」みたいな、のっけから反社会的であることが見え見えになっているイベントなのだ。なよりの証拠に、この会議に参加した連中は、ハッキングの罪で何回か警察のお世話になったことがある連中であつたりするし、そもそもアムステルダムでこの会議が開催された理由が、世界中の先進国の中で、オランダだけが、まだハッキングを取り締まる法律を整備していないからだといふのだ。ところで、私は、

「まあ、なんという恐ろしいことでしょう」

「無心にファミコンで遊んでいる子供たちに、このことをどう説明したら良いのでしょうか」
 なんてことを言おうとしているのではない。

もともと、コンピュータ、特にパーソナルコンピュータというものは、発生当初から、反社会的な根性をたっぷり内に含んでいたものだ。これぐらいのことではびっくりしてはいけなないのである。

たとえば、世界初のパソコン、「アップル」を作ったアップルコンピュータ社の創業者たちは、もとはといえば、一九六〇年代に「ブルーボックス」と言われる、電話をタダでかける機械の商売で知り合ったヒッピーくずれの連中である。そして、彼らとともに、おまわりと電話会社をおちよくることに命をかけていた「キャプテン・クラッチ」ことジョン・ドレイパーこそは、回線ハッカーの先駆者であり、実は、このたびの「第一回世界ハッカー会議」にも（回線を通じて）参加しているのである。彼が「キャプテン・クラッチ」と呼ばれるのは、同名の朝食用シリアルのおマケの笛で電話会社社長距離電話の伝送に使う信号音が出せることを発見した男だからだ。その後、彼は電話ハッカーが

らコンピュータ・ハッカーに転身した。元アップル社の巨人、ステイブ・ウォズニャックも彼から電話タダ掛け器の作り方を教わったという。ともかく二十年近いハッカー歴は世界一だろう。

さて、この興味深いニュースを、日本の新聞はほとんどまるで黙殺した。どうということなのだろう。

たとえば、朝日新聞は、二年ほど前、筑波学園都市のコンピュータに西ドイツのハッカー少年が侵入した時には、

「西独ハッカー、筑波に侵入」

と、一面トップで報じた。

また、昨年、PC-VANという日本の大手パソコンネットワークにコンピュータ・ウイルス（通信回線を通じてコンピュータに入り込んで、いたずらをする自己増殖型プログラム）がバラまかれた時には、

「コンピュータ・ウイルス日本初上陸」

と、東スポのプロレス記事みたいな見出しをつけて大騒ぎをしてみせた。

それなのに、今度は、黙殺である。なぜなのか。

彼らはこのニュースの重要性を認識するだけの想像力を欠いていたのか、でなければ、どう扱って良いのやら判断がつかなかったのだ。

たとえば、分子生物学の専門家は、新聞に載るバイオテクノロジー関係の記事を見て、その馬鹿さ加減にあきれているに違いないだろうし、同じように、自衛隊の人々は、新聞の軍事関連記事のアホ

さを笑いのタネにしていることと思うが、コンピュータの世界でもやはり同じことで、新聞のコンピュータ関連記事を見る事は、我々コンピュータ関係者の大いなる娯楽のひとつになっている。

「コンピュータ・ウイルス日本初上陸」

だって？

ははははは。

私は噴飯した。

こんなもの（PC-VANに侵入した稚拙なコンピュータ・ウイルス）は、要するに便所の落書きと同じレベルのいたずらに過ぎない。とても、一面トップを飾れるようなものではない。結局、誰も被害は受けなかったのだし、我々は、画面に妙な字が出たりすることをむしろ面白がっていたのだ。

「西独ハッカー、筑波に侵入」

これまたケチな事件だ。

新聞は「なんと、海の向こうの西独から……」てな具合に、眉間に皺をよせて「情報社会の危機」みたいなことを訴えていた。が、多少とも大脳皮質に皺のある人間なら、ちょっと考えてもわかりそうなものなのだが、電話回線を通じてハッキングをする限りにおいては、どこから侵入したのかということは、まるで意味のないことなのだ。だってダイヤルすれば良いだけなんだから。

かように、新聞というものは、専門的な分野について触れたが最後、実にあっさりと馬脚をあらわしてしまふことになっている。彼らの体には馬の脚がついている。で、顔にはヤジ馬の眼と、ロバの耳がついていて、頭の中には、古新聞が詰まっている。

話題がそれってしまった。

話を「世界ハッカー会議」に戻す。

この会議のテーマは、要するに「情報の独占への抵抗」ということであった。

つまり、政府や国家の機関が蓄えているプライバシーに関する情報や軍事情報、それに巨大マスキが懐の中でもみつぶそうとしている情報をアバくことは、人民にとって正当な権利なんだぜってことを、彼らは、言おうとしている（“Against Information Monopoly”というのが、この会議の主題であるらしい）のである。

写真に写っているメンバーの顔を見ると、どいつもこいつも、六〇〜七〇年代の、小生意気なヒッピー・カウンターカルチャーの顔をもちこたえている。日本のハッカーが「おたく族」と同一視され、「おとなしいけどキモチの悪い奴」というとらえ方をされるのと比べて、この人たちは「悪そうだし、おとなしくもなさそう」である。

日本の全共闘は、大方「体制内なんだか」とか言いながら模範的な企業人になって行ったが、向この連中は、ギターをコンピュータに持ち変えて、いまだに頑張っている。立派ではありませんか。

確かに、やっつてゐることは相も変わらずガキのわがままでしても、そういうガキのツツパリみたいなものをここまで（キャプテン・クランチを見よ！）貫徹（という言葉をよく使ったんだけどね、全共闘は）している姿勢は、とりあえず立派ではある。

で、私は思うのですが、日本のパソコンがアメリカのそれにくらべて、どこか体制的で、実務一点ばりで、まるで面白くない感じがするのは、要するに、全共闘がだらしなかつたからなのですね。

「コンピュータへのアクセス、加えて、何であれ世界の機能の仕方について教えてくれるものへのアクセスは、無制限かつ全面的でなければならぬ」

これが「ハッカー倫理」といわれるものの中心である。この倫理は、しばしば国家の管理体制をおびやかすことになる。ハッカーと呼ばれる人々の中に、服役経験者が多いのは当たり前なのだ。彼らは信念をもって「ハック」し、その結果として法を犯すのだから。

「世界ハッカー会議」は、今まで漠然としていたこの「ハッカー倫理」を、二〇〇人以上のハッカーたちが八月二〜四日の三日間、一堂に会して確認をしたという点で画期的といえよう。

このハッカー倫理こそが、アップル・コンピュータをはじめとするパーソナル・コンピュータを作り出した原動力（IBMの中央集権的マシンに対して、ひとり一台の民主的状态を生み出したという点）であり、七〇年代に（アメリカ西海岸で）始まったコンピュータ文化、およびヒッピー文化（このふたつの文化は地域的、時間的に重なり合っていた）の根本であるからなのだ。